
ギザギザハートの子守唄

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギザギザハートの子守唄

【Nコード】

N8396F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

どうしようもない不良にも彼女がいて仲間がいて。けれどそれは永遠のものじゃなかった。それがわかった時に俺は。チェッカーズシリーズ第三十七弾、あのデビュー曲です。

第一章

ギザギザハートの子守唄

ガキの頃から色々と言われてきた。

「全くあいつはな」

「どうしようもない奴だよ」

こう言われてばかりだった。とにかく俺は悪ガキだった。

確かに悪いことばかりしてきた。喧嘩もしたし万引きもいつもだった。煙草なんかもう小学六年でやっていた。流石にこれはないだろうと親に呆れられた。

中学でも有名なワルで十五になった頃にはもう立派な不良だった。誰もが言う不良だった。

それで俺も気持ちもどんどんやさぐれていった。何かっていえば喧嘩だった。肩に触れた、ガンを飛ばした、それだけで喧嘩だった。

「また御前か」

先公のいつもの言葉がこれだった。

「そんなに喧嘩が楽しいか」

「ああ、楽しいな」

強い先公だった。俺が喧嘩をする度に柔道場に連れて行ってぶん投げてくれた。俺も反撃するが適うもんじゃない。それでも幾ら投げられても止めなかった。

「止められないぜ、喧嘩はな」

「御前、本当にどうしようもない奴だな」

ここでまた投げられた。背負い投げで背中から思いきりだった。畳の上で俺の背中が打ちつけられた。

「馬鹿もここまできけば立派だよ」

「褒めてるのかよ」

「怒ってるんだよ」

こう言って今度は立たされた。そして今度は足払いだ。

「これで最後だ。今回はな」

「そりゃまたどうも」

こかされても悪びれずに先公を見上げて応えてやった。

「有り難いことで」

「また喧嘩したらやってやるからな」

「喧嘩でも煙草でも酒でも何でもやりますよ」

隠すつもりもなかった。実際にどれもこれもやっていた。長ランでリーゼント、鞆に入っているのは櫛とポマード、勉強なんて考えたこともねえ。それがこの時の俺だった。

「何でもね」

「それで挙句にどうなるんだ？」

「さあ」

そこまで考えたこともなかった。今つっぱってるだけだった。

「何とかなるでしょ」

「そのまま実家の散髪屋か」

「別にそれでいいですよ」

髪いじるのは嫌いじゃない。だから別にそれでもよかった。つっぱっていてもそのことはちゃんと考えてるつもりだった。

「それでもね」

「だが今も少しは真面目にしろ」

立ち上がった俺にこう言ってきた。今度はこれだった。

「そんなのでいいのか」

「いいですよ。喧嘩とかだけならいいでしょ」

「それが駄目なんだ。いいか」

それでまた説教だった。

「今度やったらもつと投げてやるからな」

「幾ら投げられても止めませんよ」

ふてぶてしく返してやった。

「絶対にね」

「なら勝手にしろ。俺も何度も投げてやる」

「そうですか」

「ああ。しかし今はこれで終わりだ」

そう言って踵を返してきた。背中から俺に語る。

「またな」

「ええ、また」

これで今回は終わりだった。悪びれない態度を保ったまま帰っていると校門のところで俺と同じような格好をした連中が待っていた。皆俺の仲間だ。

「よお」

「ああ」

俺はそいつ等に笑顔で応えた。応えながら手をあげてみせる。

「随分時間がかかったな」

「鬼熊に投げられていたな」

「まあな」

あの先公の名前は熊本だ。それが鬼熊になってるってわけだ。

「何でもないさ」

「投げられてもかよ」

「また随分と強気だな」

「幾ら投げられても平気なんだよ」

俺は言いながら懷から煙草を出した。安い百円ライターで火を点けて早速吸いはじめる。煙草の味が妙に口の中に滲みた。そんな感じだった。

「投げられても喧嘩は止めないからな」

「それと酒と煙草もか」

「ああ、止めないさ」

それが俺のポリシーだった。とにかくこの三つはやるが他はしない。俺もこいつ等もそれは絶対に守っていた。そこはしっかりしているつもりだった。

「その三つはな」

「真面目だねえ、俺達」

「そこいらのゾクよりもな」

「大概のソクはあれだろ」

俺は夕日の街を仲間達と横一列になって歩いていた。その中で話していた。やっぱり煙草は口から離しはしない。そのままだった。

第二章

「ただの屑さ」

「俺達も屑じゃないのか？」

「不良だぜ、俺達」

「不良でもな。外道じゃないさ」

その自信はあった。それだけは。

「だからいいだろ」

「まあそうだな。じゃあこれから何処行く？」

「カルコーク行くか」

行き着けの喫茶店の名前だった。実はそのバイトの高校生の娘は俺の彼女だ。これがまた随分と可愛い。俺の自慢の彼女だった。

「そこでちよっとコーラでもやってな」

「ああ、それいいな」

「じゃあカルコークだな」

そんな話をしながら喫茶店に向かった。それで中間達とだべっている。不意にその彼女が俺に声をかけてきた。聖子ちゃんカットにセーラー服の上から白いエプロンを着た彼女が。

「あのね」

「あっ、何だ？」

その彼女に顔を向けて応えた。仲間は皆煙草にコーラで適当にやっている。その中で俺のところに来て声をかけてきた。何か彼女だけ場違いだった。

「今日、時間ある？」

「時間？」

「夜、話があるの」

思い詰めた顔で俺に言ってきた。

「だから。いいかしら」

「何か知らねえが時間ならあるぜ」

俺は煙草を一旦口から離して煙を吐きながら答えた。

「幾らでもな。夜だよな」

「うん」

俺の言葉にこくりと頷いてきた。

「今夜。いいわね」

「ああ、いいぜ」

あらためて答えた。

「バイクで行くぜ。いいな」

「御願い。待ってるから」

「わかった。じゃあまたな」

「ええ」

ここまで話して俺から離れた。何か随分カウンターにいる親父さんの方をちらちらと見ていた。どうもかなり気にしているらしい。それはわかった。

「何だよ、彼女と何かあったのか？」

「浮気か、浮気」

仲間達が笑いながら俺をからかってきた。

「御前も隅に置けないな」

「あの娘一人だけじゃなかったのかよ」

「馬鹿言え、馬鹿」

俺はその仲間達も言い返した。そういう俺も笑っていた。

「俺は浮気なんかしてねえよ」

「してないのか」

「ああ、神に誓って言うぜ」

これは本気の言葉だった。嘘か全分ついていなかった。

「あの娘一人だけさ。ずっとな」

「ずっとか」

「ああ、ずっとだ」

また言ってみせた。

「あの娘一人だけだ。今もこれからな」

「そうか。じゃあ頑張れ」

「その意気ならな」

皆も俺のその言葉を受けてはつきりと言ってくれた。それが正直嬉しかった。

「とことんまでいけばいいさ」

「気合入れていけよ」

「ああ、それにしても」

あの娘の言葉がやけに気になる。今夜一体何があるのか。それが気になって仕方がなかった。けれどあれこれと考えているうちに時間が過ぎて。その夜になった。

俺は喫茶店に来了。店の前まで来るともうそこにはあいつがいた。真夜中で道の灯りと遠くのネオンの光が見える青い暗さの中で。あの娘が一人立っていた。

「待っていたのか」

「ええ」

俺の言葉にこくりと頷いてきた。その顔が強張っているのが見える。

「来てくれるって思っていたわ。絶対に」

「絶対にかよ」

「そうよ。もう準備はしているし」

「準備!？」

今の言葉には眉を顰めさせた。けれどこいつが何か決めているのはわかった。

「何だよ、準備って」

「私、もう出たいの」

強張った顔を俯けさせた。表情が夜の暗がりの中で見えなくなった。それでも少しだけ表情が見えた。それを見ながら俺はこいつの話を聞いていた。

「この街を」

「この街をかよ」

「ええ、この街とは何処か別の場所に行きたいの」
俯いたまままた言ってきた。

「何処かね。それで」

「それで俺を誘ったのかよ」

「駄目、かしら」

ここで顔をあげてきた。そのうえで俺に問うてきた。

「二人で。駄目かしら」

「二人か」

俺は話を聞きながらとりあえずは懷から煙草を出した。それを啜えてライターで火を点けて少し味わいながら言葉を返した。

「一人だったらどうしようもないよな」

「御免なさい、私一人じゃとても」

「そうだよな。家出だからな」

俺の方から家出という言葉を出してみせた。俺がわざと自分から出してやった言葉だ。

「一人じゃ寂しいよな」

「それで。駄目かしら」

「あのな」

俺は相変わらず煙草を吸い続けていた。そのうえであいつに答えてみせた。

「俺、御前の言うことで何か言ったことがあるか？」

「えっ!？」

「ないよな」

こう問い返してみせた。

「ないな。じゃあわかるな」

「………いいのね」

「今からだよな」

静かにこいつを見ながら尋ねてみせた。顔はやっと上げてきているがまだ強張ったままだ。

「今から。街を出るんだよな」

「もうすぐ終電だから」

返事はこうだった。

「だから。いいわよね」

「今から行けば間に合うな」

俺は言っちゃった。

「行くなら早くな。荷物は俺が持ってやる」

「あんたのはいいの？」

「ないものは買えばいいさ」

俺はこう言葉を返してやった。

「バイトしてるからな。金もあるしな」

「バイト。してるの？」

「当たり前だろ。じゃあ何で金あるんだよ」

また問い返してやった。強がりの言葉だったがこれは事実だった。

第三章

「俺はカツアゲとかしないのは知ってるだろ」

「それはそうだけれど」

「だったらバイトしかないよな。そういうことだよ」

「そうなの。それじゃあ」

「ああ、行くぜ」

今度は俺から言っちゃった。

「何処までも付き合っちゃるさ」

最後は笑っちゃった。それで終電の駅まで二人で行った。そこで暫くその終電の電車を待っていた。すると電車が着くより前に。駅の階段を何人も駆け下りてきた。

「んっ！？何だよ」

「えっ、まさか」

「いたか、そこか！」

聴き慣れた声だった。カルコークのマスター、こいつの親父さんの声だった。

「捕まえたぞ、行かせるか！」

「お父さん、どうして！」

「御前のことなんかすぐわかる！」

やっぱり親父さんだった。目を怒らせて俺達のところに来た。ここでやっと電車が来た。

飛び乗ればいい。後は電車が何処かに連れて行ってくれる。筈だった。けれどそれはできなかった。その電車に飛び乗るより前に。俺もあいつも捕まった。電車の扉が俺の目の前で空しく閉じられた。そうして電車は俺達を残して走り去って行った。

「行った・・・・・・・・」

「おい！」

俺の上には親父さんがいた。俺の上で馬乗りになって怒り狂った

顔を夜の中で見せていた。

「御前か！」

「何だよ」

この親父さんにも悪びれずに言葉を返した。

「俺が何だよ」

「御前があいつを！あいつを！」

「だったらどうだってんだよ」

いつもの調子の売り言葉に買い言葉で。俺は言葉を返してやった。これが間違いだった。

「俺だったらどうするんだ？」

「死ね！」

その言葉と一緒に拳が来た。思いきりその顔をぶん殴られた。

「御前があいつを騙したんだな！許せん！」

「違うの、お父さん！」

「御前は何も言うな！」

完全にドラマだった。親父さんは頭に血が登っていてもう言葉が耳に入らなくなっていた。

「こいつが！こいつが！」

「止めて！止めて！！！」

「御前は悪くない！」

親馬鹿だった。娘が悪くないと頭から決めていやがった。力任せにとことんまで殴られながら俺はその親馬鹿を聞いていた。聞いているうちに気が遠くなって。気付いた時には病院のベッドの上だった。枕元にいたのはあいつじゃなくて仲間達だった。心配そうに俺を見ていた。

「気付いたな」

「俺、気を失ったんだな」

「ああ。大丈夫か？」

「って言いたいけれどな」

ここですぐに全身に鈍い痛みが走った。かなりきつかった。

「無理だな。痛えよ」

「痛いかな」

「かなりな。顔、どうなってる？」

「言わなくてもわかるだろ」

「酷いものだぜ」

仲間達の言葉が苦笑いになった。それでもう充分わかった。

「そうか。ボコボコか」

「たこ焼き幾つもくつつけたみたいだぜ」

「物凄いな」

「道理で痛い筈だぜ。それであいつは？」

「喫茶店に連れ戻されたさ。御前がそのかしたことになるな」

「そうか」

そう言われても別に頭にはこなかった。親父さんがあいつを大事に思っているのは知っていたから。だから意地でも認めたくはないとわかっていたからだ。

「じゃあもうあの店には行けねえな」

「そうだな」

「他の店に行こうぜ」

「そうするか」

このことはすぐに決まった。しかしそれでもまだ。話は終わっちゃいなかった。仲間の一人が俺に対して言ってきた言葉がそれを教えていた。

「で、このことな」

「ああ」

「学校に伝わったぜ」

「学校にか」

「親父さんが言ったんだ」

「だろうな」

あの親父さんしかいなかった。そんなことをするのは。それもこれもやっぱり親馬鹿からだ。悪いのはとことんまで俺、そんなに悪

いのかと思える程だ。

「じゃあ俺は退学か？」

「いや、それはないらしい」

「おいおい、また随分と変な話だな」

俺は仲間の一人の言葉を聞いて痛みに耐えながら笑ってやった。

何とかいつものふてぶてしさを出してやろうと思ったからだ。

「俺が全部悪いんだろ。それでどうしてなんだよ」

「鬼熊が庇ってくれたんだよ」

「鬼熊が！？」

最初にこの言葉を聞いた時。俺は我が耳を疑った。

第四章

「冗談だろ。何であいつが」

「いや、それがマジだ」

「あいつが校長や教頭に掛け合ってな。今回は許して欲しいって言っ
てな」

「それでか」

「一応停学だ」

そういうことらしい。少なくとも学校を辞めさせられるわけじゃ
なくなった。

「暫くな。それはどうしようもなかった」

「そうか」

「ああ。それでな、俺達考えたんだ」

「何をだよ」

「御前を入れて七人で」

いつもこの七人でやって来た。七人いれば何も誰も怖くなかった。
喧嘩もバンドも。いつも七人で楽しくやって来た。その七人の言葉
が出て俺は心の中で何かと思った。

「鬼熊に札を言いに行こうと思うんだ。どうだ？」

「確かにいつもぶん殴られたり投げられたりだけれどな。今回は恩
があるしな」

「だな」

俺も仲間達の言葉に頷いた。自分でも驚く位自然に。

「退院して停学が明けたらな」

「行くぜ。いいな」

「ああ」

こうして退院して停学が明けるとまずは鬼熊のところに行った。
すると鬼熊は俺達を見てまずこう言ってきた。完全な先制攻撃だっ
た。

「礼なんかいらんぞ」

「おいおい」

「俺達まだ何も言ってるねえぞ」

向こうからいきなりこう言われて思わずすごんじまった。考えを読まれてると思ったからだ。

「それで何でだよ」

「何か言わせろよ」

「だから礼なんていいと言ってるんだ」

鬼熊は丁度職員室に入るところだった。そこで俺達に声をかけられ顔を向けてきていた。だがすぐに俺達に身体を向けて話をしてきたのだ。

「俺はそんなのはいらん」

「随分勝手な奴だよな」

「全くだぜ」

鬼熊があんまり頑固だから俺達はいついついものの悪態をついた。

「折角だから礼を言おうって言ってるじゃねえか」

「それで何でそんなこと言うんだよ」

「そんなに礼が言いたければちゃんと卒業しろ」

悪態をつく俺達に言う言葉はこれだった。

「わかったな。御前等卒業やばいだろ、全員」

「ちっ、言ってくれろぜ」

「忌々しいけれどその通りさ」

これも七人全員一緒だった。どいつもこいつも大馬鹿野郎だ。勉強なんてガキの頃からしたことねえ。鞆の中には空気しかねえ。それか警棒かナイフだ。教科書もノートも鉛筆もねえ。そんな俺達が今の高校を卒業できるかどうか怪しいのは当然のことだった。

「わかったらそれだけを考えろ」

鬼熊はまた言ってきた。

「いいな、それだけだ」

ここまでするとさっさと職員室に入りやがった。残ったのは俺達

七人だけだ。俺達は職員室の前で顔を見合わせて。今度はお互いに言い合った。

「帰るか」

「ああ、そうだな」

こう言い合って頷き合った。

「ここにいても仕方ねえしな」

「そうだよな。しかし鬼熊の奴」

あらためて鬼熊のことを考えた。考えながら今あいつがいる職員室に目を向けた。けれど誰も中に入ろうとはしなかった。ただ職員室の前に立っているだけだった。

「相変わらずむかすつく奴だな」

「全くだぜ」

この時はただこう思っただけだった。どいつもこいつも。

「折角こつちが頭下げるっていうのによ」

「それで何だよ、あの態度」

「まあいいじゃねえかよ」

仲間のうちの一人がここで言ってきた。

「鬼熊がいいっていうんならな。それはそれでな」

「いいか」

「ああ、帰ろうぜ」

そしてこんな話になった。

「教室にな。皆単位も悪いだろ」

「まあな」

これも全員だった。やっぱりどいつもこいつもまともに授業に出る奴等じゃない。それで単位なんて取れる筈がなかった。正直全員留年すれすれだ。

第五章

それで授業には出ることにした。こっからはごく普通の不良としての学園生活だった。カルコークには寄らなくなっただけで。けれどそれが急に終わっちまった。

真夜中だった。家に急に電話がかかってきた。電話に出たら仲間の一人だった。こいつがリーダー格、簡単に言うと言長だった。それから声がかかってきた。

「何だよ、御前から」

「大変なことになった」

そいつは震える声で俺に言ってきた。

「そこにあいつもいるな」

「あいつ？ ああ」

弟のことだ。双子で俺と一緒に仲間達とつるんでる。それで七人ってわけだった。

「いるぜ。何か用か？」

「二人で来てくれ、すぐにな」

「すぐにつて喧嘩か？」

最初はこう思った。こいつも随分喧嘩が好きだからだ。

「御前一人じゃ無理なのかよ。相手何人だ？」

「悪いが喧嘩じゃねえんだ」

声が震えたままだった。俺はそれを聞いていい加減おかしいと思った。それで尋ねた。

「何かあったな」

「死んだ」

急にこう言ってきた。

「死んだ？」

「ああ、バイクでな。死んだんだよ」

「死んだって誰がだよ」

嫌な予感がした。けれど誰が死んだのか全然わからない。だからまた聞いた。すると仲間の一人のことだった。バンドでドラムをやっているあいつが。死んだ。

「今さっき俺も話を聞いたんだ」

「マジか」

「こんな嘘言うと思うか？」

「いや」

否定した。こいつの性格はよくわかってる。だからすぐに否定した。

「ないな。じゃあマジか」

「駅前の病院だ」

今度は場所を言ってきた。

「他の奴にはもう声をかけてある。すぐに来てくれ」

「駅前のか」

「わかったな。今すぐだ」

「ああ、わかった」

答えるのと一緒に電話を切って服を着替えた。黒い皮ジャンだ。ついでに弟に声をかけて二人でバイクで病院に向かった。病院にはもう仲間が集まっていた。真夜中でも土砂降りだったからどいつもこいつも派手に濡れていた。けれどそんなことはもうどうでもよかった。

「来たな」

「やっぱり事実なんだな」

「ああ」

「マジだ」

仲間達は俺に言ってきた。集まっている廊下の一番奥に扉がある。一人がそこを指差して俺に言ってきた。

「あそこにいるぜ。寝てるよ」

「寝てるか」

「ああ、寝てる」

寝てるってのが何の意味か。もう言うまでもなかった。

「奇麗なものだぜ。案外な」

「そうかよ」

「まだ信じられねえよ」

別の奴が廊下の待合用の椅子に座って頭を抱えて言ってきた。

「あいつが死んだなんて。嘘だろ」

「いや、嘘じゃねえ」

「見ただろうが」

「ああ」

そいつは他の奴に言われてそれを認めるしかなかった。その通りだった。

「そうだよな。やっぱり」

「死んだのかよ、マジで」

俺は目の前に見えるその扉を見て呟いた。正直言ってまだ信じられねえ。

「バイクで。何てこった」

「お通夜は明日らしいな」

俺を呼んだリーダーが言ってきた。

「出るよな」

「当たり前だろ」

俺はすぐにその言葉に答えた。

「仲間じゃねえか。葬式にも出るぜ」

「俺も」

「俺もだ」

ここにいる奴はどいつもこいつも同じだった。だから仲間をやっている。そうじゃなきゃ仲間なんかやってる筈もない。俺達はそんな仲だった。

「じゃあ決まりだな。行くぜ」

「ああ」

こうして俺達は死んだあいつの葬式に出た。それが終わってから

残った奴等で向かったのは。病院で聞いたあいつが死んだ場所だ。線路の下のカレージ。見ればガードレールが激しくへこんでいた。

「ここにぶつかっただんだな」

「そうみたいだな」

一人が俺の言葉に応えてきた。

「血とかはなかったのかよ」

「打ち所が悪くてな。それで駄目だったらしい」

「ちっ」

俺はその説明を聞いて。思わず舌打ちした。

「そんな簡単にくたばりやがってよ。何なんだよ」

「けれど死んだのは確かだ」

「あいつはもう」

「わかってるさ。っていうか」

お通夜と葬式のことを思い出して。俺はまた言った。

「あいつは死んだんだ。それはわかるさ」

「そうだな」

「ガードレールがもう」

「馬鹿野郎が」

俺は今度はこう言った。

「さよならも言わないでよ。何なんだよ」

「いや、言おうぜ」

一人がここで言ってきた。

「ここで死んだんだからな。だから」

「ここですか」

「ほら」

誰かがスプレーを出してきた。いつもこうした場所で落書きに使っていたスプレーだ。それを俺に手渡してきた。

「最初は御前が書け」

「俺か」

「皆で書くからな。最後の言葉だ」

「あいつのだな」

「ああ、そうだ」

また俺に答えてくれた。

「皆で書こうぜ。最後にな」

「わかった。じゃあまずは俺がな」

「ああ、書け」

「書こうぜ」

こう言い合ってからまずは俺が書いた。赤いスプレーだった。俺は一言あばよって書いてやった。書いていて何も言えなくなった。最後の奴が書き終えると。

泣いた。俺だけじゃない。今ここにいる奴皆が。自然に涙が出て。それで泣いちゃった。

「馬鹿野郎が」

最初に言ったのは俺だった。

「死にやがってよ」

「全くだ」

一人が俺の今の言葉に頷いた。こいつもやっぱり泣いていた。声まで泣いていた。

「七人でずっと一緒だって言ったじゃねえかよ」

「何で死んだんだよ」

「御前一人だけ」

皆言い出した。涙に濡れた言葉で。六人の言葉が一つになっていった。

第六章

「卒業しようって言ったじゃねえか」

「それでどうしてなんだよ」

「御前だけ。六人で卒業しろって言うのかよ」

「ふざけるな」

それぞれの言葉が出てきた。本当に自然に。

「七人でだろ」

「御前も卒業しろ。もうすぐじゃねえか」

「死んだなんて。馬鹿かよ」

言っても仕方がない。それでも言った。言いながらただただ泣いた。冬なのにまた雨が土砂降りになって。それで言い続けて泣き続けた。冬の寒い夜の中で。

六人で泣いた俺達はそのまま卒業式を迎えた。俺達の行く先はどいつもこいつも適当だった。そこいらの工場に入る奴もいれば俺みたいに実家の手伝いになったり。そんなのばかりだ。それでバンドもやっていく。卒業してもあまりやることは変わらない感じだった。それで卒業式が終わって解散になっても。俺達はただ学校に残っていた。卒業証書を持っていても何か。何でこんなもの持っているかわからなかった。

「なあ」

不意に仲間の一人が言ってきた。

「俺達何を卒業したんだ？」

「高校じゃねえのか？」

「この高校なんだろう」

泣いている奴等の間で言い合う。俺達だけ何か別世界だった。

「これだって持ってるしよ」

卒業証書を見る。見てもどうってことはない。本当に持っただけだった。手が埋まるだけだった。

「ここを卒業するんだろ」

「へっ」

俺は仲間の言葉を聞いていて。自然に言葉が出た。

「机に向かってガリガリやって。したいことも全然出来なかったな」

「そうだったな」

「何だったんだよ、ここ」

「何でもなかったんだろ」

俺はまた自然に言葉が出た。

「こんなところな。何でもないだろ」

「何でもないか」

「帰るか？」

いても仕方ない、本気で思った。

「こんなところにいてもしょうがねえだろ」

「どっか行くか」

「何処に行く？」

自然とこんな話になった。本当に自然にだった。ここでも自然だった。

「バンドの練習に行くか？」

「バンドか」

「悪くないな」

「それか喫茶店か」

今の俺達の行きつけの店だ。

「そこにするか？」

「そうだな。そこでもいいな」

「まあ何処でもいいや」

そんなグダグダした話をしてた。とりあえず学校は出るつもりだった。ところがここで。この俺達に対して声をかけてきた奴がいた。そいつは。

「おい、御前等」

「あん！？ あんたかよ」

「何なんだよ」

鬼熊だった。どういふつもりかわからねえが俺達に声をかけてきた。

「御礼参りとかは俺達の趣味じゃねえぜ」

「悪いが他あたってくれよ」

「御礼参りなんかもうとっくに返り討ちにしてわ」

鬼熊は俺達に対して今度はこう言い返してきた。表情を変えずに。

「軟弱な奴等だったな」

「何だ、じゃあ話は終わりだな」

「あばよ。もう会うこともねえだろ」

「そうだな。これで一旦はお別れだ」

鬼熊の方もそれはわかってる感じだった。

「けれどその前にだ」

「何なんだよ」

「御前等に言っておくことがある」

どういう風の吹き回しか変なことを言ってきた。

「俺達に？」

「そうだ」

何か話がさっぱりわからなかった。卒業したらもう終わりだったのに。正直言って遂に頭がおかしくなっちゃまったのかとさえ思った。

「これで卒業だな」

「そんなの言うまでもねえじゃねえか」

「だからあんたともお別れなんだよ」

「御前等、最後位人の話は聞け」

いつもと同じ言葉だった。最後って言葉が入ったことだけがいつもと違う。卒業しても変わりそうにないのはこの学校自体がそうだがこいつはまたその中でも特別変わりそうになかった。

「いいか」

「だるいな、おい」

「まあいいさ。最後だしな」

最後だ。これが俺達の気持ちを鬼熊に向けさせた。普段ならさっさと帰って首根っこ引っつかまれて無理矢理聞かされるところだ。けれど今は違っていた。

第七章

「聞いてやる。これでいいだろ」

「ああ」

「で、何なんだよ」

「俺達に用ってよ」

「カルコークだがな」

あの店だ。当然あの娘とも全然会ってねえ。それどころか店の近くにすら寄らなかった。あの親父さんに会ったらそれこそ洒落にならなかったからだ。

「行ってみたか」

「おい、あんた遂にぼけたのかよ」

「俺達があそこに行けるわけねえだろうが」

俺達はすぐに反論した。反論しながらこいつ何馬鹿なこと言ってるんだって思った。思うとそれこそ言葉が止まらない、そんな感じだった。

「何を言うかって思えばよ」

「そんな馬鹿なことかよ」

「俺が馬鹿なこと言うか」

けれど鬼熊は俺達にこう言葉を返してきた。その大きな身体をさうに反らせて。

「いいか、今からカルコークに行け」

「俺達全員でかよ」

「そうだな、全員がいいな」

「全員っておい」

「本気かよ」

「本気っていうか正気か、おい」

俺達は思わず好き勝手に鬼熊に対して問い返した。

「何で俺達がカルコークなんだよ」

「特に俺だよ」

俺は自分から名乗り出た。やっぱり思わずだった。

「何かあったか知ってるよな」

「っていうかあんたが知らない筈ないだろ」

「そうだそうだ」

俺達はまた口々に言った。言葉が止まらない感じになっていた。

「こいつの退学止めたんだからな」

「そのあんたがどうしてもそんなこと言うんだよ」

「話はいい」

しかし鬼熊は。あくまでこう言ってきた。随分頑固な感じだった。

「とにかく行ってみろ。いいな」

「行って何があっても知らねえぞ」

「あの親父さん、いるんだぜ」

そう、あの親父さんがいる。あの時俺を気絶するまでとことん殴ってくれたあの親父さんが。きっちりと店にいて頑張ってくれている。このことははっきりとわかっていた。

「どうなるやら」

「まあ向こうは一人だな」

こうも言い出す奴が出て来た。

「こっちは六人だ」

「やるか」

また別の奴が言った。

「いざって時はな」

「ああ、その時はやってやろうぜ」

「御前の仇だな」

俺にも声をかけてきた。弟を含めて五人の目が俺に集中した。

「やってやろうぜ」

「容赦はいらないな」

「そんなことは後で言え」

また鬼熊が俺達に声をかけてきた。何か絶妙のタイミングだった。

「後でな。好きなだけな」

「まずは行けってことかよ」

「そうだ」

はつきりと答えてきた。

「カルコークに行ってから言え。いいな」

「・・・・・・言っとくけどマジでどうなっても知らねえぞ」

リーダー格が真剣に鬼熊に言った。俺達のまとめ役だ。

「あそこに俺達が行ったら」

「あの親父さんだからな」

「散弾銃でも出るんじゃないのか？」

この言葉は半分本気の響きだった。とにかく娘のことになったら人が変わる親父さんだ。だから銃を持ち出す位のことは考えられた。

「そうなたら本当にやばいな」

「死人出るかもな」

「死人が出る筈がない」

また鬼熊の断言だった。どうしてこうまで自信たっぷりなのか。

俺達はこの時は全くわからなかった。頭がおかしいんじゃないのかと短い時間の間に数え切れない位思った。

「絶対にな」

「刃傷沙汰か？」

「そりゃ同じじゃねえのか？」

「そうか。まあ殴り合いには普通になるだろうな」

「そうだろうな」

俺達はこの位は覚悟していた。けれどまた鬼熊は。相変わらずの感じで俺達に言ってきた。今思うとこいつは本当に何もかもわかっていて。

「とにかく行け」

「何度言ってもそれかよ」

「そうだ、これだ」

向こうも開き直った感じになってきた。

「何度でも言うからな」

「へえへえ、わかりましたよ」

「行けばいいんだろ、行けば」

俺達ももう観念して。悪びれた感じで応えてやった。

「カルコークによ」

「じゃあ行くか」

「鉄パイプ用意しとくか」

「あと鎖とかだな」

「俺警棒持つてるぜ」

だが自然に。喧嘩への備えになっていた。派手な喧嘩になるとやっぱり武器だった。俺はよく鉄パイプで喧嘩をした。これが一番俺に合ってた。

「じゃあそれと鉄パイプ何本かか」

「ストックも用意しとくか」

「ああ、念の為にな」

「御前等最後の最後まで物騒だな」

俺達の話を聞きながら。鬼熊の言葉が呆れたものに変わっていた。

「平和には行けないのか」

「相手が相手だよ」

「だからだよ」

話が少し元に戻った感じになっていた。

「とにかく行くからよ」

「あんたもどうだい？」

「俺もか」

声をかけられた鬼熊は。こいつには珍しいキョトンとした顔になっていた。

「俺も行くのか」

「俺達が喧嘩したらあれだろ？だったらよ」

「教師引率の方がいいだろ」

「御前等今卒業したのにか」

鬼熊はここで俺達に卒業のことを告げた。

「それで俺にも行けって言うのか」

「ああ、そうか。卒業だよ」

「俺達卒業したんだよ」

「そうだ、そうだ」

「今さっきのこと位覚えておけ」

また鬼熊の呆れた声が俺達にかけられた。

「全く。馬鹿だな、御前等は」

「馬鹿で結構。とにかくだよ」

俺が鬼熊に声をかけた。

「あんた、行くのか？行かないのか？」

「俺か」

「そうだよ。どっちなんだよ」

卒業なんか関係なかった。とにかくそれを聞いた。

第八章

「行くのだったら一緒に行こうぜ」

「今すぐな」

「そうだな」

俺の言葉が決め手になった感じだった。鬼熊が静かに応えてきた。

「悪くないな、それも」

「じゃあ行くのかよ」

「ああ、折角だしな」

鬼熊は少し笑って俺達に答えてきた。

「誘ってもらったからには行くさ」

「そうか。それじゃあな」

「今から一緒に行こうぜ」

「よし」

俺達の言葉に頷いてみせてきた。

「行くぞ。カルコークにな」

「じゃあな」

「まあ引率ってことだな」

こうして俺達は鬼熊と一緒に七人でカルコークに向かった。今までの七人とは違う。けれど間違いなく七人でカルコークに向かった。そして店に入ると。

「用心するか」

「そうだな」

何だかんだで警棒やらチェーンやらは用意しておいた。鉄パイプもだ。とにかく親父さんを警戒していた。この時には散弾銃をマジで覚悟していた。

店の扉を開ける。しかしそこに親父さんはいなかった。それどころか。

店のあちこちが派手に飾られてた。色紙の鎖や花が壁に飾られて

いておまけに。何かでかかと卒業おめでとうって文字まで見えた。
綺麗な看板の言葉だった。

「何だこりゃ」

「パーティーか？」

店に入った俺達は思わず呟いた。店が明らかに普段とは違っていた。

「誰か予約入っていたんじゃないのか？」

「だったら俺達が来た意味ねえじゃないかよ」

「だから。よく見ろ」

そんな俺達の後ろで鬼熊が言ってきた。

「よくな。店の中をな」

「よくってよ」

「こりゃどう見てもあれだろ」

俺達は鬼熊に顔を向けて言い返した。どう見ても俺達のものじゃないと思ったからだ。

「卒業パーティーじゃねえか」

「俺達のじゃねえだろ」

「まさかな」

「そのまさかよ」

この時だった。店の奥から声がしてきた。

「あっ!？」

「その声は」

「ええ、そうよ」

ここでまたその声がしてきた。

「私よ、私」

「御前……」

あいつだった。駆け落ちしたあいつだった。その親父さんが目の中に入れても痛くない程可愛がってるあいつが。俺達の前に出て来た。信じられないことに。

「いたのか」

「当たり前でしょ。私の家のお店だから
俺の方に歩いてきて。こう言ってきた。」

「いて当たり前じゃない」

「それはそうだけれどよ」

「言いたいことはわかってるわ」

「今度はこう俺に言ってきた。」

「どうして。お店の中がこうなっているのかよね」

「ああ」

その言葉に頷いた。

「そうだよ。これは一体何なんだよ」

「あんた達の為よ」

俺達がいも思ひもなかった言葉がここで出て来た。

「俺達の？」

「そう、そして」

そしてさらに言葉を続けてきた。

「特にあんたの為のね」

「俺の為か」

「あれから。ずっとお父さんに話したのよ」

少し俯いてから。申し訳なさそうに俺に言ってきた。

「あの時のこと。私が誘ったって」

「あの時のことをかよ」

「最初は信じてくれなかったけれど」

それはわかった。あの親父さんはかなり頑固だ。それに娘を何処までも可愛がってる。だからあの時も派手に殴られまくった。その時の記憶も蘇った。

「けれど何度も話して。やっと」

「そうだったのか」

「今度は私が殴られたわ」

「殴られたっておい」

俺が殴られた時は気絶した。あれを女が受けたらどうなるか。こ

れもすぐにわかった。

「大丈夫だったのか？それで」

「何とかね」

「何とかっておい」

「そのことはどうでもいいの」

けれどこのことはどうでもいいと。言ってきた。

「大したことじゃないから」

「そうなのかよ」

「そうよ。それでね」

殴られたことをあっさりと終わらせて。そのうえでまた俺に言ってきた。

「あんたのことも言ったわ」

「俺のこともかよ」

「このことも何度も言っつて」

俺のことまで話していたなんて思わなかった。まさかこんなことになるなんて思わなかったから。だから余計に思った。信じられなかった。

第九章

「それであんたのこともわかってもらったから」

「許してもらったってことか」

「そうよ。その通りよ」

「そうだったのかよ」

「あんたが悪いわけじゃないって。わかってもらったから」

「別にそんなのいいけれどな」

俺は視線を外して答えた。本当にそんなことはどうでもよかった。けれどそれでも。誤解が解けたのはそれでも嬉しかった。これは本音だ。

「別にな」

「それで今日は」

「これか」

「そう、これ」

店の中を手で指し示して俺に述べてきた。

「こうしたの。どうかしら」

「卒業式に合わせてか」

「来てくれるかどうかからなかったけれどそれでも」

「来るつもりはなかったさ」

俺は卒業おめでとうって言葉を見ながら答えた。本当にまさかここに来るなんて夢にも思っちゃんいなかった。鬼熊に会うまでは。

「マジでな」

「そうだったの」

「俺が連れて来たんだよ」

鬼熊がここで笑って告げた。俺達じゃなくこいつに。

「この連中をな」

「そうだったんですか」

「そうさ。ちょっと苦労したがな」

「うふふ」

「うふふって笑うのかよ」

女そのものの笑い声を上げるのを見て俺は言った。

「何なんだよ、ったくよお」

「いいじゃない。それに」

「それに？」

ここで俺にまた言ってきた。

「何だ？今度は」

「その今度よ」

俺の言葉尻を捕まえる形になった。少し気分が悪くなったのは内緒だ。

「今度はね」

「今度……何なんだよ」

「お父さんいいって言ってくれたから」

「あの親父さんがいい！？」

話が全く読めなかった。何が何なのか。

「何がなんだよ、一体」

「だから。駆け落ちしなくてもね」

「あんなのはもう二度と御免なんだが」

「だから。それをしなくてもいいのよ」

話が全く読めない。こいつは何が言いたいんだと心の奥底から思った。ひょっとして俺をからかってるんじゃないかとさえ思った。

内緒で。

「もうね」

「もうって。本当にわかんねえんだだけだよ」

思わず尋ね返した。するとこいつは今度ははっきりと俺に対して言ってきた。

「結婚してもいいって」

「結婚！？」

その言葉を聞いて驚いたなんてものじゃなかった。今何て言った

のかマジでわからなかった。何かこんなばかりだとも思ったが。

「誰と誰が結婚するんだ!？」

「あたしとあんたよ」

「俺と御前」

「お父さんはいって言ったから」

「じゃああれか」

ここまで聞いてやっと頭がまともに動いてきた。酒のせいであり悪くなってる自覚はあったがそれでも全然動いちゃいなかった。今の今まで。

「俺と御前が結婚して」

「このお店に入るのよ」

「何だよ、それ」

思わず聞き返してしまった。

「無茶苦茶になってるじゃねえかよ、完全に」

「けれど悪い話じゃないでしょ」

「そういう問題じゃねえよ」

無性に腹が立って俺はまた言い返した。

「いきなりそんなこと言われてもよ、何言ってるのやら」

「けれど嫌じゃないんでしょ」

「人の話聞いているか？」

「そっちこそ」

話が堂々巡りになってきていた。痴話喧嘩めいてもいた。

「聞いているの？人の話」

「聞いているさ。結婚しろってか」

「してもいいって言ったけれどそうよ」

言葉はそのまま出るとは限らない。裏がある場合もある。今回はまた随分と露骨にそれが出ていた。嫌になる位にまで出ていやがった。

「そういうことよ」

「じゃあ俺に選択肢ねえじゃねえかよ」

「こういう場合は男はそうね」

「男はかよ」

「全部女が決めるのよ」

親父さんは？って言いたかったがもうそれも無駄だった。思えばカルコークに來たのが運の尽きってやつか。とにかく完全にこいつのペースだった。

「わかったわね」

「わかったさ」

うんざりした顔で言っただけ。表情は俺のせめてもの意地ってやつだ。

「御前の言う通りしてやるよ」

「それでいいわ」

「ったくよお」

仲間達も鬼熊もまだいた。けれど仲間はまだ見ていただけだった。鬼熊は俺達を見て笑ってる。嵌められたのが完全にわかる流れだった。

「何なんだ、ここまで」

「とんでもない話になってるんだけどよ」

その仲間達がやっと口を開いてきた。戸惑いまくっているのがすぐにわかった。

「結婚って何か」

「狐に抓まれた感じだよな」

「いいじゃないか、壊れた愛ってやつが回復したんだぞ」

鬼熊は嬉しそうに俺達二人に対して言ってきた。

「それがいいことじゃなくて何なんだ？」

「さてな。何なんだろうな」

無然として鬼熊に言い返してやった。

第十章

「あんたはわかってるんだよな」

「わかってるさ。最高の結末ってやつだ」

「最高の結末かよ」

「こういうのは。確か英語で」

ちなみにこいつは国語の先生だ。得意なのは古典だ。寝ていたらそれだけで頭に拳骨が落ちて来る。それがまた金槌みたいに痛くてとんでもなかった。

「何て言ったかな」

「ハッピーエンドだろ」

俺が鬼熊に言っただけでやった。俺が言うなんてまさかと自分でも思った。

「それだろ、確か」

「そうだよ、それだ」

「こんなの中一で習うぜ」

だから俺でも知ってた。もっとも俺は九九が何とか言えるって程度の頭しかねえが。勉強なんてしたこともないのが俺の自慢だった。

「覚えてろよ、先公がよ」

「俺は国語だからな」

「そういう問題じゃねえだろ」

こうは言ったがそれでも話は続く。鬼熊はこれに悪びれることもなくまた俺とこいつに言ってきた。

「まあそれでだ」

「ああ」

「はい」

「これからもっと仲良くやるんだぞ」

笑顔で俺達に向けた言葉がこれだった。

「いいな、もっとな」

「結婚するからか」

「ああ、そうだ」

また笑っての言葉だった。

「幸せにな」

「あんたにそう言われるなんてな」

違和感があるなんてものじゃない。けれどもう話は動いていた。

「まあいいじゃない」

「いいって」

「嫌じゃないわよね」

今度俺に尋ねてきた言葉はこうだった。

「私と一緒になくても」

「まあな」

これは本当だった。別にそれは嫌じゃなかった。

「御前のことは好きだしな」

「それじゃあ。一緒に」

「一緒にか」

「そう、何時までも一緒よ」

にこりと笑って俺に言ってくる。その笑顔はこれまで見たこともない可愛さだった。正直言って今までもかなり可愛かったがそれ以上だった。とにかく可愛く見えた。

「何時までもね」

「別れた恋が一つになるんだよ」

ここで鬼熊が柄にもないことを言ってきた。これもかなり意外だった。

「いいことじゃないか。じゃあよ」

「何だ？」

「ただの卒業パーティーにはしないぞ」

これも鬼熊のリードだった。

「いいな、おい」

「えっ、俺達!？」

「俺達か？」

「御前等以外に誰がいるんだ」

仲間達に対しての言葉だった。とりあえず俺は除外されてるみた
いだった。

「違うか？」

「そうなのかよ」

「それで何なんだ？」

「あれだよ」

鬼熊はまた言う。

「二人の祝福だよ」

「それか」

「そうだよ、だからやるぞいいな」

こうして鬼熊の音頭で卒業パーティー兼俺達の祝いのパーティー
もはじまった。それは決して悪いものじゃなかった。むしろ気持ち
のいいものだった。ギザギザハートが一つになって。何を卒業した
のかわかった。俺達がガキじゃなくなった。悪ガキを卒業したって
ことだった。

ギザギザハートの子守唄

完

2008・6・29

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8396f/>

ギザギザハートの子守唄

2010年10月8日15時27分発行